

19. 肝細胞癌の局所抗癌剤注入療法

——肝シンチ, CT 像の変化

今枝 孟義 山脇 義晴
 又吉 純一 加藤 敏光
 柳川 繁雄 鈴木 雅雄
 土井 偉蒼
 (岐大・放)
 河田 良
 (同・2外)

過去3年間に, 抗癌剤局所動注を施行しえた32症例の内, 肝癌発見時から1年以上生存した5例を対象として, その経過観察中の肝シンチ, CT像の変化につき検討を加えた.

抗癌剤の注入量は, 総肝動脈内に挿入したcatheterよりMMC 20~30mgを注入し, さらに1~2か月後に2回目を, それ以後は3~6か月に1回の割合で動注を施行した. 動注と動注の間は5-FU 250~500mg/日か, 5-FU dry syrup 200mg/日を投与した. 動注回数は2~5回, 生存期間は1年3か月~2年4か月(内, 1例は現在生存中)である.

一般に肝癌の予後は, 腫瘍が大きいものは小さいものに比べ, 肝硬変症が有るものはないものに比べ, AFP値が高いものは低いものに比べて悪いといわれているが, 対象症例では腫瘍の大きさは5例中3例が手拳大以上であり, 肝硬変症はすべてに認められ(内1例に腹水あり), AFP値は3例が 10^3 ng/ml以上であった. 肝シンチ像を数か月単位で比較すると目立った変化を認めなかったが, 全過程を通してみると, すべての例で経過とともに欠損像の増大, 増加を認めた. 動注によって延命効果はあったが, 癌の発育を完全に抑えることはできなかった.

CTは肝シンチ上の欠損像の大きさが目立って変わらない場合でも, 中心壊死を検出するなど治療効果判定に役立った. 腫瘍内の壊死は動注2~3か月後に出現し, その増大, 増加をきたした. またこれら症例のCT上の特徴的所見は腫瘍の輪郭がenhanceによって濃染された(capselによる)ことである.

20. 胸部 ^{67}Ga スキャンの臨床的検討

亀井 哲也 山崎 俊江
 立野 育郎
 (国立金沢・放)

対象: 原発性肺癌22例, 転移性肺癌9例, 縦隔腫瘍5例, 炎症性疾患10例の計46例につき臨床的検討を行なった.

結果ならびに考案: 肺癌非照射例11例の ^{67}Ga スキャン陽性率は82%であった. 照射例11例の陽性率は73%であった. 転移性肺癌9例の陽性率は89%, 炎症性疾患10例の陽性率は40%であった. 組織型別による陽性率は腺癌は2例中2例, 扁平上皮癌では9例中8例, 未分化癌では3例中3例, 燕麦細胞癌では1例中1例, 細胞診のみの4例では3例が陽性であった. 集積をみなかった2例は, いずれも照射例であった. 組織型別からみた ^{67}Ga スキャン集積濃度は, 腺癌で最も高く, 次いで未分化癌, 燕麦細胞癌, 扁平上皮癌の順であった. 腫瘍の大きさからみた ^{67}Ga 集積濃度には差はみられなかった.

組織型別の集積濃度は, 従来の報告とやや異なり, 腺癌, 未分化癌でやや高濃度の傾向が見られたが, 今後, さらに検討しなければならない.

放射線照射例11例と非照射例11例の検討では著明な差を認めなかった. 予後との関係もあり, 今後さらに検討していきたい.

21. ^{67}Ga 乳房集積例の検討

松田 博史 利波 紀久
 大口 学 久田 欣一
 (金大・核)

今まで当科で施行された530例のGaスキャン中女性14例, 男性1例に乳房集積をみた. 年齢は20~30歳代がほとんどを占めた. 両側に著明な集積をみた4例中3例に乳汁分泌がみられ, 両側に軽度集積9例中6例になんらかの薬剤服用の既往がみられた. また, 片側に著明な集積をみた例は